

## 日系アメリカ文学 —強制収容所内の文学活動 ①ポストン収容所—

篠 田 左多江  
(昭和61年9月30日受理)

### Japanese American Literature : —Literary Movement in Poston Relocation Center—

Sataye SHINODA  
(Received September 30, 1986)

#### はじめに

アメリカ合衆国における第2次大戦中の日系人強制収容については最近、多くの研究が発表されている。しかし収容所内での文学活動について述べたものはほとんどない。収容所内で文学活動にたずさわっていた人びとのうち、戦後、ある者は日本へ帰り、ある者は戦前に住んでいた西海岸地方を去って、未知の東部、中西部で新しい生活を始めねばならなかった。この時期の混乱によって多くの資料が失われてしまったばかりか、戦後40年あまりたった今、当時生活していた人々から話を聴くことも年々難しくなっている。実体を調査し、記録することは急務であると思われるが、筆者は幸いにもアメリカにおける数回の調査の結果、断片的ではあるが収容所内の出版物を入手することができた。また、直接文学活動にたずさわっていた方々から当時の状況に関する証言を得ることもできた。

収容所内の文学活動を記録することは、日系アメリカ文学史、日系アメリカ移民史の両面から重要である。日本人移民による文学は、彼らの存在の証として短詩型文学を中心に邦字新聞の発達とともに1905年頃から書かれており、第2次大戦前にはいくつかの小説、歌集が発行されていた。戦争により日本人社会は崩壊を余儀なくされたが、文学活動は収容所内でも絶えることなく続き、かえって盛んでさえあった。戦後1950年以降、一世、帰米二世による作品、同人誌が次々と誕生したが、基礎となったのがこれらの文学活動である。それは収容所内の文学活動が多くの文学愛好者を育てた結果であった。これらを記録することにより、それぞれの人がどのような

きっかけで文学に親しみ、その経験を戦後の文学活動へと結びつけていったのかを解明することができる。

文芸誌を移民史の観点から考察すると、戦時定住局(WAR)<sup>1)</sup>の報告書からは知ることのできない収容者の微妙な心理状態が読みとれる。そして日米戦争と強制収容という最悪の事態の中で日系アメリカ人がいかに対応し、困難を克服していったかを明らかにすることができるであろう。収容所内での文学活動の全貌を明らかにするのははまだ時間を要するが、この小論ではポストン収容所における文学活動について述べることにする。

#### 1. 日米開戦と日系アメリカ人

1941年12月7日、日本軍によって真珠湾攻撃が行なわれると、アメリカ合衆国内の日系人約11万7000人は敵国人種となった。この直後、ローズヴェルト大統領は在留敵国人法1798にもとづく布告を出し、これに従って連邦検察局(FBI)はアメリカの安全をおびやかすと考えられる日系人を逮捕し、身柄を拘束した。日本語新聞、日本語学校関係者や日本人社会の指導的立場にある人びとは、十分に理由も説明されないまま次々に逮捕され、のちに抑留所へ送られた<sup>2)</sup>。

一方、合衆国市民権をもつ二世をも含むすべての日系人の生活も根底から覆される日が近づいていた。日本軍がアジアにおいて連戦連勝を続けた戦況が、アメリカ国内の世論を刺激し、かねてから日系人に敵意をもっていた人びとはこの機に乗じて、日系人非難ののろしをあげた。日系人のスパイ活動やサボタージュのまことしやかな流言が広まり、新聞も連日これを報道して、古くからあった反日感情の火に油をそそぐ結果となった。1942年2月19日、ローズヴェルト大統領はついに大統領行政命

令第9066号に署名した。これによって西海岸3州<sup>9)</sup>に住する日系人は市民権を有するか否かにかかわらず、生活の場から根こそぎ引き抜かれて、収容所へと送られたのである。

戦争勃発から3カ月半後、日系人はそれぞれの居住地の近くに設けられた16の仮収容所(Assembly Center)へ集められた。仮収容所は大部分が博覧会場か競馬場を改装したもので、到底人が住めるような所ではなかった。人びとはここで2カ月あまりを過ごしたのち、5月末から11月の間に奥地に急造された転住所(Relocation Center)へと送られた。そこはRelocation Centerと呼ばれてはいるが、鉄条網がはりめぐらされ、監視塔には24時間、銃を持った見張りの兵士がいる、まさに「強制収容所」であった。1946年に最後の収容所が閉鎖されるまで<sup>1)</sup>、短い人で1年余り、長い人は4年近くも収容所生活を余儀なくされたのである。

## 2. 強制収容所内の出版物

日系人が最終的に収容された転住所は、10カ所あって人間が住むには相応しくない砂漠や湿原に造られていた。建物は旧兵舎または急造のプレハブで、柱に厚板を打ちつけ、その上にタールペーパーを貼っただけであった。砂漠地帯ではすき間から砂が吹き込み、室内でも外にいるのと変わらない有様であったし、猛暑や厳寒を耐えるには余りにも不十分だった。また11万人以上を収容することは困難であったため、居住部分は狭く、6×7.5メートルの部屋に2家族が住んでいる場合もあり、プライバシーなどまったくなかった。

このような状況下にあっても人びとは、なんとかして人間らしい生活をするよう努力した。WRAもまた、学校を開き、神道以外の宗教活動<sup>9)</sup>、さまざまなレクリエーションを奨励して、人びとが絶望的な心理状態に追い込まれないように配慮した。ある程度の自治活動も許され、WRAに対し入所者から要求を出すことが出来て、生活状況は当初と比べれば次第に改善されていった。野球チームをはじめとする多種のスポーツクラブ、演劇、音楽、ダンス、囲碁・将棋などのゲーム、美術などあらゆる分野のレクリエーションが行なわれた。

新聞は各転住所で発行された。編集長以下のスタッフは収容者だが、WRAの情報担当官の監督の下におかれて、英語で書かれた。新聞の目的は情報の伝達であったため、英語の不自由な一世のために日本語版も付けられ

ていた。新聞は、戦前に日本人社会で発行されていた日本語新聞とは異なり、娯楽的要素は少なく、WRAからの情報を正確に収容者に伝える記事と収容者同士の情報交換が大部分を占めていた。特に収容者が再定住のため外部に出る時期になると、再定住に必要な各都市からの情報や出所者の体験談が多く掲載された。これらは日刊、週刊、週に2、3回といったものもあり、発行回数はスタッフなどの状況によりさまざまであった。Heart Mountain Sentinel(ハートマウンテン収容所)、Minidoca Irrigator(ミニドカ収容所)、Manzanar Free Press(マンザナー収容所)の3紙は、収容者が自発的に組織した協同組合の経営によって発行された。Heart Mountain Sentinelは活版印刷であったが、他は謄写版であった。資金の一部はWRAに依存していた。

多種のレクリエーションの中には文学活動も含まれていた。収容前、日本人社会には多くの短歌、俳句、川柳の会があり<sup>9)</sup>、各地の日本語新聞の文芸欄を主な発表の場として盛んな創作活動を行ない、いくつかの歌集も刊行されていた。このような日本語による短詩形文学の担い手は主として一世であった。一方、二世の文学活動も1920年代の末頃から始まり、彼らの詩が日系英字新聞<sup>9)</sup>および日本語新聞の英文欄に掲載されるようになっていた。

鉄条網に囲まれた収容所内で3度の食事をあてがわれ、無為に暮らすことを余儀なくされた人びとが、同好者を集めて活動したのは当然であった。WRAも収容者の精神的苦痛を和らげるため、このような活動を奨励した。収容者は同人誌を発行した。戦前、文学同人誌は次々に発行されていたが、資金難からいずれも短命で、3号まで続けばよいとされたほどであった。しかし収容所内では暇な時間がたくさんあり、その活動が人びとの生きがいでもあったことから長続きし、多いものでは31号を数えた。主な同人誌には、ポストン収容所の『ポストン文芸』、『もはべ』、ハートマウンテン収容所の『ハートマウンテン文芸』<sup>9)</sup>、トゥールレイク収容所の『鉄柵』<sup>9)</sup>、『怒濤』<sup>10)</sup>、グラナダ収容所のPulse<sup>11)</sup>、トパーズ収容所のAll Aboard<sup>12)</sup>、『ポピイ』<sup>13)</sup>がある。これらは収容所の状態が落ちつき、環境もいくぶん改善された1943年に始まり、収容所が閉鎖される1945年まで続いた<sup>14)</sup>。

この他、いくつかの短詩型文学の小冊子も謄写版で作られた。Cactus Blossoms<sup>15)</sup>(ヒラリヴァー収容所)、『北米短歌』<sup>16)</sup>(ハートマウンテン収容所)、『ポピイ句

集』<sup>17)</sup> (トパーズ収容所), 『グラナダ吟社俳句集』<sup>18)</sup> (グラナダ収容所), 『渦巻』<sup>19)</sup> (トゥールレイク収容所) などは同好者の間に配られたものだが、紙不足という困難な状況の中で作られたことであり、人びとが作歌に生きがいを見出し、いかに真剣に取り組んだかを示している。

### 3. ポストン収容所の生活

全米10カ所の転住所のひとつポストン収容所は、正式には Parker Relocation Center といい、アリゾナ州南西部の砂漠地帯にあるコロラド川インディアン保留地 (Colorado River Indian Reservation) の中にあった。所内は3つの地域に分かれており、1万人を収容する Unit 1 はサンタフェ鉄道パーカー駅の南11マイルのところであり、5千人収容の Unit 2, Unit 3 は同じ駅からそれぞれ20マイル、23マイル離れていた。合計2万人の収容能力を持つこの収容所は、10カ所のうち、最大の規模であった。1942年5月8日、最初の立ち退き者が到着した。収容者は砂嵐と酷暑、サソリやガラガラ蛇 (収容者は鈴蛇と呼んでいた) に悩まされたという。砂嵐について貴家志ま子は、「食堂内の……食物を並べるカウンターの上は風の為に吹き込む土が積もって、何遍拭いても無効であるし強い風の時には到底小さな布などでは拭き取れないから、水道の口にホースを付けて水で流すのである。窓は悉く閉めて置いてもあちこちの隙間や屋根の隙の間から澤山に入ってくる。若い婦人らの美しく結びあげた髪も見てゐる内に土色に変わってしまふ」<sup>20)</sup> と書いている。また、風戸登代は、「風うなりつなみの如く打つ砂に 建つバラックも 見えつかれつ」<sup>21)</sup> と詠った。ポストンの土は俗に brown talcum powder dust と呼ばれ、すぐに舞い上がり、物に付着すると容易に落ちないという。その上、夏の暑さは大変なもので、「真夏の平均気温摂氏四十三度というモハベ砂漠はまさに焦熱地獄であった。バラックの日陰から日なたに出ると、ガスがまのフタを開いたときのような熱気が顔を襲った」<sup>22)</sup> とのことである。

しかし人びとは努力を重ねて、次第にこの不毛の地を人が住める所へと変えてゆく。入所1年後には監視も形式的になり、黙認のうちにコロラド河畔への散策が許された。人びとは砂嵐を防ぐため、バラックの周囲に挿し木で簡単に増やせる柳や cotton tree などの木、devil grass と呼ばれる芝草の一種をたくさん植えた。

当時は農業に従事していた人も多かったため、この作戦は成功し、2年目には緑の木陰を楽しむことができたようである。また、花を栽培し、器用な人は池を作って川でとった魚を入れ、橋までかけた。『ポストン文芸』の編集を行なった一世・松原信雄は、自宅の戸口に「日本人、至る所悉く楽土と化さん意気を持つべし」と書いて掲げたというが、人びとはまさにこのような気持ちで工夫をこらしたと思われる。

だが、人びとは花を作り、歌を詠んで暮らしていたわけではない。それはあまりにも厳しい現実をしばし忘れる数少ないなぐさめのひとつであった。長い間の努力の末築き上げたすべての生活を捨てなければならなかった人びとの欲求不満は、つのるばかりだった。市民権を拒否され、日本人として生きる一世とアメリカ人である二世、日本で教育を受け、日本人としてのアイデンティティをかなり持っている帰米二世の間にわだかまっていたものが、一挙に爆発した。それに加えて、白人管理者への不満があった。普通の日本人社会であれば騒動にならないような些細な意見の食い違いも、狭い収容所内では深刻な対立へとエスカレートして行く。一世、二世、帰米二世を問わず、キリスト教徒で合衆国に協力しようとする人びとと、仏教会に属する親日派との間の対立は深刻化していた。

1942年11月14日、評議員<sup>23)</sup>のひとりである帰米二世が何者かに襲われた。これは30才の男子で、収容前はカリフォルニアで米の仲買人をしていたが、はなはだ評判の良くない人物であった。その上、真珠湾攻撃後、金のために多くの日系人をスパイとして当局に密告したという風評がたっていた。収容所においても同様に密告行為があったと非難されていた。この襲撃事件は戦前の日系人社会から持ち越された憎悪が、実際に過激な行動となって表われたものにすぎない。11月16日、犯人として2人の若者がFBIによって逮捕され、所内の刑務所に留置された。2人は日系社会ではきわめて評判のよい若者であったところから、人びとはその刑務所をとり囲み釈放を要求して、日常生活に不可欠な部所を除くあらゆる作業の場でストライキを行なった。これに多くの人びとが参加したのは、思想的に共鳴したというよりもむしろ、それまで従順にWRAの指示に従ってきたが、これからは言うなりにはならないという決意を示した結果であった。2人は間もなく23日に釈放され、騒動はおさまったが、このような事件はポストンだけでなく、大小の差はあれ、

どの収容所でも起こっている。

入所してまだ1年にもならず、やっとわずかな落ち着きを取り戻した矢先の人びとに動揺を与えたのは、WRAの再定住計画と志願兵募集であった。1943年1月になると、WRAは収容者の再定住を促進する政策を取り始め、現地事務所を設立して西海岸以外の諸州、特にシカゴ、ソートレイクシティへの再定住をすすめた。合衆国に忠誠を誓った二世が従軍してゆき、これに批判的な一世、二世は家族をもまきこんで対立する。それに加えて、自らも西海岸を除く他の場所へと再定住しなければならない。<sup>24)</sup>二世は東部や中西部に出ていっても暮らしている自信があるが、西海岸以外の場所で暮らしたことがなく、英語も不十分な一世にとって、もとの自分の家へ帰れないことは痛手だった。たとえ排斥がなくても他の地域へ移り住むことはためらわれた。待ちに待った収容所からの解放ではあるが、手ばなしで喜ぶことはできなかった。1944年12月までには、ここから従軍した二世のうち13名が戦死し、人びとはその死を悼んで追悼集会を開き、風戸登代は「年老いし 母にやさしき子なりしがイタリーの野に 戦死せりといふ」<sup>25)</sup>と詠んだ。人びとの動揺が続く中、日本の敗戦後約3カ月を経て、1945年11月28日、ポストン収容所は閉鎖されたのである。

#### 4. ポストン収容所における文学活動：

##### 『ポストン文芸』と『もはべ』

ポストン収容所における文学活動は、前述のような状況下で始まった。収容所内で最初に活動を開始した文学会は、記録されているものでは短歌同好会「ポストン歌会」で、1942年9月20日に第1回会合を開いている。「お先真っ暗の立退、処は炎熱地獄てふアリゾナの一隅、我等を待つものは生か、死か、その悲壮な覚悟を以て子を案じ老親を案じつつポストン入をした」<sup>26)</sup>人々は、その苦しさや不安を何かを書くことで解消しようとした。収容所が開始された当初は印刷物の配布が禁じられていたため、矢形溪山、石川凡才など川柳愛好者は、やむなく大きな紙に川柳を書き、36カ所のメスホール（食堂）入り口に週1、2回貼出した。石川は当時を振り返って、「その貼出した句、歌稿に幾人かが足を留め批判している様を眺め、ほほ笑んだ事あり、我等の努力が報いらる事を喜び合った事もある。」<sup>27)</sup>と述べている。すべての食堂に貼って歩く作業は2日かかりで、終わるとぐったりと疲れたというのが、拘束された中でも何かを創り出

したいというやむにやまれの気持ちが、これらの行動を支えていた。同人誌の巻頭言の中の「たとへ我々は不如意な環境に置かれていても、その環境に負けない丈の健全な精神力の養成が必要である。失望の為沈滞せんとする精神を慰藉してくれ、自暴自棄に堕さんとする精神を鼓舞激励して呉れるよき文藝こそ転住所内同胞に最も必要なものである」<sup>28)</sup>という言葉が、収容所内で文学活動の果たした役割を最もよく表わしている。人びとは自らの悲慘きわまりない境遇をただ嘆き怒るのではなく、数年間の収容所生活を自己の精神修養の場に変えようとした。

同人誌『ポストン文芸』と『もはべ』は、開始1年後の1943年2月と3月に相次いで創刊された。これ以前からUnit 3（通称第3館府）にペンクラブという文学同好会があって同人誌を出していたが、1943年3月にこのペンクラブが、Unit 2の人びとをメンバーに加えて新しく文芸同人の会を作り、WRAの社会奉仕局次長（Assistant Chief of Community Service）ジョン・パウエル（John Powell）の管轄下に月刊誌『もはべ』を発行した。パウエルは創刊号に次のような挨拶を載せている。

The discipline of the emotions by the mind, which is poetry, is of especial importance under the circumstances in which we find ourselves. The discipline of classical poems also, is valuable in reminding the poet that others before him have met sorrow and compelled it to yield to courage.<sup>29)</sup>

パウエルは、収容所の状況下で詩の果たす役割は重要であるとして、文学活動を奨励した。人々に打ち込めるものを与えて収容所の生活をうるおいのあるものにすることが、WRAの政策であった。

誌名『もはべ』は『モハベ』であったり、変体仮名で書かれていたり、時によりまちまちである。発刊の時の中心となったのは楠瀬正巳（正美）で、トゥールレイク収容所へ赴く1944年春まで編集を担当した。その後、編集は山根貞蔵に引き継がれた。楠瀬正巳は、サンフランシスコからサンタ・アニタを経てポストンに至ったというだけで、経歴などは不明である。当時同人として参加していた村田聖明氏によれば、彼はヨーロッパに留学し、のちにカリフォルニアに移り住んでおり、当時60才ほどで独身であったという。『もはべ』という名は、ポスト

ン収容所のあたりに住んでいるモハベ族インディアン (Mohave または Mojave Indian Tribe) にちなんだものである。楠瀬正巳は合衆国の被抑圧民族として自己との共通点を見いだしたためか、このインディアンに心魅かれたようで、奥付きに「遙々と 移されて住む ポストンの モハベの旧蹟に 蝦夷菊を植ゆ」と記している。

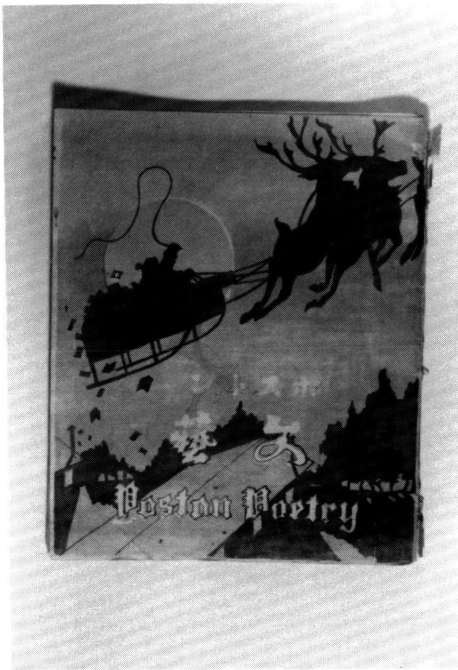
『もはべ』の記事には、短歌、俳句、川柳、折々に感じたことを記した随筆のようなものが多い。印刷は謄写版、字もまちまちで変体仮名もまじっており、かなり不鮮明である。各々が原紙に鉄筆で書いたものを編集部を持ち寄って作ったと思われる。初期(1943年)の短歌、俳句などは評価、選択をせず、習作をすべて載せたと思われる。しかし1年後には全体の字が楷書になり、短歌や俳句の選者も定まり、作品の質も向上している。

一方、『ポストン文芸』はポストン文芸協会の同人誌で、『もはべ』より1カ月早く、1943年2月から Unit 1 で発行された。前に述べた1942年9月の短歌、川柳の会を母体として発足した。『もはべ』とは異なり住民の自治組織である統政部に属しており、形式上はWRA 社会奉仕局長の管轄下におかれていた。同人はポストンだけでなく、他の収容所およびサンタフェ、クリスタルシティなどの抑留所も含め、1945年の終刊時で348人を数

えた。オフセット印刷で、技術的には『もはべ』よりずっと優れており、表紙には緑などの色も使われ、時には本文にも写真が載せられている。創刊時から1944年まで矢形溪山、その後、松原信雄、有田百を中心として常時4～5人で編集を行っており、短歌、俳句、川柳などには各々選者がおかれていた。筆耕は富田虎山、のちに瀧井謹平であった。読みやすい達筆な字で書かれているが、毎号約60ページ分の原紙をひとりで書き上げるのは、大変な労力だったと思われる。瀧井は、「生来字を書く事の好きな者であるから、傍の方々の思われるようには苦にならなかった……また細かい字を三時間位続けると好きでも相当くたびれる。其時は好きな尺八を吹くのだ。嫺々たる尺八の妙音とは言えないが、自ら之を聴くと何時しかグラグラの頭も爽快になる。それから又始める。是を毎日繰り返すのである。」<sup>30)</sup> と述べて、楽しみつつ書いたことを示している。

1, 2号はポストン仏教会の印刷機を借用したが、のち独立して中嶋一が担当する印刷所で行なった。中嶋は入所前から印刷所を経営していたが、収容所内の印刷所にはいり、所内出版物の印刷を手がけていた。「かつて私は帝国印刷所経営中、月末集金の面倒な時など、只の一年でもいいからお金を頂かず支払もなく、印刷に没頭出来たらこんな愉快はないだろうと思った事がありましたが、ポストン印刷所では其空想が実現し」<sup>31)</sup> たのだと述べている。発行日の前には統政部員が全員印刷所に集って、手作業で製本をしたとのことである。

『ポストン文芸』の発行部数は、断片的に記録されているだけであるので完全に把握できない。1944年7月号が600部、1945年7月号が1000部以上という記録がある。<sup>32)</sup> 1944年末頃には再定住者が増加して収容所の人口が徐々に減少し、他の収容所の文芸誌が廃刊になったこともあって、その分だけ『ポストン文芸』の読者が増えたと思われる。WRAの記録によれば、ポストン収容所における収容者数は最高時で17,867名であった。このうち、日本語の文芸誌を読むことができる一世と帰米二世の数は合わせて約7,880名である。1945年までにはかなりの収容者が出所している。その多くは二世であったが、一世、帰米二世の数もこれより減少していると考えられる。また他の収容所および抑留所にも108人の同人がいたこと、希望者への通信販売もあったことを考慮にいれても1000部という発行部数は非常に多い。所内でさかんに回覧されたと思われるので、日本語を自由に使用する



『ポストン文芸』表紙 1944年12月号

ことのできる一世と帰米二世（収容所内人口の44.1%）  
 の中ではかなりの影響をもっていたと推定される。

製作費はWRAから援助を受けていたが、1945年には  
 所内の定価が20セント、外部への送料も含めた定価は25  
 セントで、他に寄付金もあったと記録されている。各ブ  
 ロック（通称部落）ごとに責任者をおいて配布したが、  
 毎月の配布を担当していた重富初枝氏によると購読料を  
 集金した記憶はないとのことである。したがって一応定  
 価が書かれてはいるが、毎号の編集後記に寄付金に対す  
 る謝辞が掲載されているところから、購読料は寄付金  
 のような形で納められていたと思われる。

『ポストン文芸』も『もはべ』と同様、総合誌の形式  
 をとっているが、短詩型文学の作品と解説がその半分を  
 占めている。その他は、随想、短編小説、収容所で催さ  
 れた日本舞踊公演の解説と評、文学論、作歌法、日本歴  
 史のエピソードおよび化石、刀、宝石のような趣味の話  
 である。強制収容の不当性や戦争について論じることな  
 く、政治とは無関係な趣味の世界に没頭した人が多かつ  
 たのは、ひたすら苛酷な経験を忘れ、一時的にせよ現実  
 から逃れようとしたからであろう。随想や短編小説のテ  
 マは、2種に分けられる。収容所に至るまでと所内の生  
 活に題材を求めたものおよび渡米前の日本の故郷での経  
 験や思い出を綴ったものである。前者には、感情を生々

しく表現したものは見当たらず、どちらかと言えば淡々  
 と書かれたものが多い。後者からは合衆国内の収容所で  
 書かれたという状況が全く感じられない。これは検閲を  
 考慮して、当局との間に問題は起こしたくないとする自  
 主的な抑制力が働いたと思われる。編集者は、作品の要  
 約を英文に翻訳して娯楽担当課長へ提出していた。『も  
 はべ』の編集後記には「……何分非常時局下に於いて吾々  
 敵国人は或程度言論の自由を奪はれて居るのですから、  
 苟くも米國々策に反する様な記事詠歌はこの際遠慮して  
 欲しいと思うのであります。この点に鑑み余り露骨に日  
 本精神を賞揚したり米國政府当局を刺激したり又個人や  
 団体に対し名誉毀損になる様な作品は……」<sup>39)</sup> 編集部で  
 自主的に掲載をとりやめる旨を述べている。検閲といっ  
 てもあまり厳しいものではなく、当局から掲載を禁じら  
 れた例はなかったようだが、検閲の前に編集部で取捨選  
 択を行なったのであるから当然であろう。

『ポストン文芸』新年号には懸賞小説の募集があり、  
 1945年に1等に選ばれたのは、収容所内で人妻が妻子を  
 もつ男に淡い恋心を抱く短編小説「一つの解決」であっ  
 た。2等は「志願兵」と決定、「志願兵」は2月号に掲載  
 される予定であった。しかし、2月号にその小説はな  
 く、「藝術作品として立派な作品であるが、時節柄その  
 表現内至字句に多少誤解を招く憂ひありと認め、編輯会



『ポストン文芸』の編集にたずさわった人びと      ポストン収容所にて 1945年

議の結果甚だ遺憾乍らその発表を暫時見合わせることに一決した」との断わり書きがある事実からも、編集者が当局の意向に相当神経質になっていたことが証明される。当事者の証言によると、検閲は次第に形式的なものになっていたようである。それでもなお、自主的に作品の妥当性を検討したところに、不当に自由を奪われた状況におかれてさえも秩序を守る善良な市民であろうとした「おだやかなアメリカ人」としての日系人像がうかがえる。

淡々とした作品が多いもうひとつの理由は、人びとが失ったものがあまりにも大きかったため、嘆きや怒りをあからさまに書く気力を失っていたことである。失ったものを悔やみつつ毎日を送るのはあまりにも惨めであった。それゆえ人びとは怒りや悲しみを心の奥深くにとじ込めて、出来るだけ平静を保って生きようとしたのではないだろうか。

戸川明は詩「甘藷の蔓」の中で「ああ可憐な甘藷の蔓よ！／お前は伸びているけれど／それ以上伸びてはいけない／お前の周囲を見てごらん／餘りに殺風景ではないか／お前がいくら伸びても／からみつく可き物は一つもない／伸びよ／そして伸びれば伸びるほど／煩悶しなければならぬお前だのに／お前はどうしても伸びやうとするのか」<sup>39)</sup>と書いて、収容所生活を強いられた人びとの煩悶をジェリーカップに入れた水栽培の甘藷に例えている。また「路傍石語」の中では次のように書いている。「砂漠は廣すぎた／土も砂も乾き過ぎてゐた／何処に捨ててよいのか？／私達にこの泪／その日の日記には／これだけしか書いてなかった／そして立ち退いて来た私達だ／常春のカリホルニアから／こゝ炎熱のアリゾナへ」<sup>39)</sup> 彼が日記にほとんど何も書けなかったように、他の人びともあまりにも辛い体験を書く気になれなかったことは想像に難くない。

巻頭言には、日本人の血をうけた者として先祖に恥じない行動をとろうという呼びかけが繰り返されており、人びとがいかにして平静な気持ちで収容所生活を送るかに心をくだいていたかがうかがえる。収容所経験者によれば、初め一世の多くは日本帝国の勝利を信じており、ひたすら耐えて持っていれば必ず日本軍が迎えに来てくれると思ひ、その日を心の抛り所としていたとのことである。しかし戦局は日本に不利になって勝利など望めなくなった時、人びとは精神的支えを失った。ちょうどそういった時期、1944年の巻頭言の中で、松原信雄は「……今日こそ、せめて今日一日丈でも心静かに、不平を唱へ

ず、人を非難せず、他の罵聲やデマに心乱される事なく、唯人を益する事のみを考へ、さうして他に飲ばれる善事をしよう」<sup>39)</sup>と述べている。編集者このような呼びかけは、いかに人びとがデマに迷われ、スパイや密告を恐れて疑心暗鬼のうちに暮らしていたかを示している。

もの書くことで人びとが慰められたとするならば、文学などに全く無縁であった人にもものを書く楽しさを教えたのがこれらの文芸誌であった。以前は労働に明けくれる忙しい毎日を送っていた人びとも、収容所内では自由に使える時間がたっぷりあった。短歌、俳句、川柳などの会は活発に活動し、毎月会合が開かれ、作品は批判、添削された。選ばれた作品は誌上に発表された。人びとは自分の作品が誌上に掲載されるのを楽しみに創作に励んだという。『ポストン文芸』同人には収容所を出てから歌集を出版した戸風登代、谷本晩香、泊良彦および戦後、『南加文芸』の同人となり、詩の創作を続けた戸川明がいた。

1944年頃からはWRAの方針に従って外部へ再定住する者が増え、『ポストン文芸』の編集に携わっていた人びとの顔ぶれも変わっていく。『ポストン文芸』は収容所が閉鎖される2カ月前の1945年9月に終刊となった。

## おわりに

全米10カ所の収容所の中でポストン収容所は、ハートマウンテン、トゥールレイクとならび文学活動が盛んであった。ここでは戦前から文学愛好者の多い南カリフォルニア都市部出身の人びとが多く、一世を中心として帰米二世が加わり、WRAの承認の下に二つの文芸誌『もはべ』および『ポストン文芸』が誕生した。3人寄れば俳句の会が出来ると言われるほど日本人は短詩型文学を好むが、収容所という困難な状況の中で3年の間ほぼ定期的に発行されたことは、この活動がいかに多くの人びとの熱意に支えられていたかを証明している。

これらの文芸誌の果たした役割は大きい。文学に興味は持っていたが創作活動に割く時間を持たなかった人に文学活動に参加する機会を与え、戦後の日系アメリカ文学の担い手を生み出したこと。さらに収容所という特殊な環境の中で、動揺する人びとの心になぐさめと楽しみを与えたこと。いかなる苦難に遭おうとも日系人としての誇りを捨てず、秩序ある行動をとろうと繰り返し書いて啓蒙したことが、人びとの混乱を防ぐ一助となったこと。また日系人が民主主義の国アメリカに居住しながら、

もっとも民主主義に反する方法で強制収容所へ送られ、どのような生活を強いられたかを語る記録としても貴重である。

今回はボストン収容所における文学活動について述べたが、目下他の収容所についても調査をすすめており、今後すべての収容所内の文学活動を明らかにし、作品の分析をおこなって、収容所内での人びとの状況を文学の面から考察する予定である。

## 謝 辞

この小論作成にあたり、ボストン収容所生活を体験された元ジャパントイムス編集長村田聖明様、甲南女子学院大学教授重富初枝先生、北米毎日新聞社フレズノ支局ジョン・クボタ様から貴重なお話を伺い、資料の一部をご提供いただきました。厚く御礼申し上げます。

## 註

- 1) War Relocation Authority: 1942年3月, 大統領行政命令第9102号により設立された戦時転住局。局長はミルトン・アイゼンハワー。太平洋岸特別戦略地域からの敵性外国人の立ち退きから再定住までの業務をおこない、1946年6月終了。
- 2) FBIのエドガー・フーバー長官によれば、1941年12月10日現在の日系人逮捕者は1291人であった。
- 3) Washington, Oregon, California の3州。
- 4) 1946年1月までにトゥールレイク収容所を除く全収容所が閉鎖された。この後もトゥールレイク収容所は拘留者用に使われ1946年3月21日閉鎖。
- 5) 神道は国家神道であり、天皇崇拝につながるとして禁止された。
- 6) 佐々木ささぶね(修一)によれば、1930年代に主なものだけでも11の吟社が存在した。
- 7) 1930年代には James Sakamoto によりシアトルで発行されていた日系英文紙 *Japanese-American Courier* の第3ページが文芸欄で、二世の英詩が発表されている。
- 8) 岩室吉秋、大久保忠栄を編集責任者として1943年12月創刊、1944年9月終刊。月刊誌だが、スタッフや紙の入手事情により不定期になることもあった。
- 9) 1944年4月創刊、1945年9号をもって終刊。編集責任者は山城正雄、野沢穰二、河合一夫。ほぼ2カ月に1度発行。
- 10) 鶴嶺湖男女青年団の機関誌、帰米二世・藤田晃を中心として1944年に創刊。
- 11) *Granada Pioneer* (グラナダ収容所の新聞)の付録として発行された英文誌、詩、短編小説などを含む。
- 12) Toshio Mori, Evelyn Kirimura, George Sugihara, Kimi Shimamura の編集により、詩、評論、短編小説などを掲載した約60ページほどの季刊英文誌で、1944年春創刊。
- 13) トパーズ俳句同好会「ポピイ之会」の機関誌。1944年秋から1945年8月まで続いた月刊誌。
- 14) この他、ヒラリヴァー収容所『若人』、ローワー収容所『志からみ』、マンザナー収容所『マンザナ川柳』などがあったが、現存するものが少ないため、目下調査中である。
- 15) Ferne Downing 編、ヒラリヴァー収容所内 Butte High School の生徒の作品を集めた詩集、12ページ、1945年。
- 16) 高柳沙水編、1944年10月、1945年1月に出されたハートマウンテン短歌会同人の作品集。
- 17) ポピイ之会編の自由律俳句集。1945年、49ページ。
- 18) グラナダ収容所の閉鎖にあたってグラナダ吟社によって編纂された俳句集。
- 19) 泊良彦による開戦以来の歌350首を収めた短歌集。
- 20) 『ボストン文芸』12月号、(1944年) pp. 39~40
- 21) 風戸登代: 『ちぎれ雲』、日本文芸社(東京)、1965年、p. 61。風戸登代(かざと・とよ)は、1906年に渡米、1942年までフレズノで農園を経営、戦中『ボストン文芸』同人。
- 22) 村田聖明: 『最後の留学生』、図書出版社(東京)、1981年、p. 120
- 23) 収容所の運営は収容者による自治で、評議委員会の委員が住民からの選挙によって選ばれ、各ブロックにはこれも住民選出のブロックマネージャーがおかれた。
- 24) WRAは1944年12月まで西海岸への日系人の帰還を禁じた。
- 25) 「藻葉邊歌壇」『もはべ』10月号、(1944) p. 54
- 26) 石川凡才、「ポ文創刊時代の思い出」、『ボストン文芸』7月号(1945年) p. 51
- 27) 同上、p. 52
- 28) 「巻頭言」『ボストン文芸』7月号(1944年) p. 1



- 29) 「ジョン・パウエル氏書翰」『もはべ』創刊号  
(1943年3月) p. 1 大衆社 (Los Angeles), 1938年
- 30) ポストン文芸同人：『ポストン回顧録』, 1945年  
pp. 29~30 村田聖明：『最後の留学生』図書出版社（東京）,  
1981年
- 31) 同上, p. 31 風戸登代：『ちぎれ雲』, 日本文芸社（東京）, 1965年
- 32) 同上, p. 42 US Governnt: *Personal Justice Denied*,  
Washington DC, Government Printing Office,  
1983.
- 33) 「編輯室便り」『もはべ』5月号, (1943年) Dillon Myer: *Uprooted Americans*, Arizona,  
University of Arizona Press, 1971.
- 34) 『ポストン文芸』7月号, (1944年) p. 40 Buddhist Church of Poston III: *Mohaveland*,  
Poston, Arizona, 1945.
- 35) 『ポストン文芸』9月号, (1945年) 『ポストン回  
顧録』 p. 2 The American Red Cross: *The First Year*,  
Poston, Arizona, 1943.
- 36) 「朝の想念」『ポストン文芸』8月号, (1944年) p. 1 Alexander Leighton: *The Governing of Men*,  
Princeton, N. J., Princeton University Press,  
1945.

#### 参考文献

ポストン第3館府文芸同人社編：『もはべ』  
ポストン文芸協会編：『ポストン文芸』  
佐々木ささぶね：『ハリウッドの畸人 田中稔林』

#### Summary

Immediately after the Japanese attack on pearl Habor on December 7, 1941, the leading figures of the Japanese society were arrestnd by FBI as alien enemies. When President F. D. Roosevelt signed Executive Order No. 9066 on February 19, 1942, all the Americans of Japanese ancestry, whether citizens or not, were uprooted from their residence and sent to sixteen assembly centers and then to ten relocation centers surrounded by barbed wire. These relocation centers were virtually concentration camps which were not suitable for living. Japanese Amricans were forced to live there nearly for three years. This is one of the dark pages of American history.

War Relocation Authority (WRA) encouraged internees to take part in various kinds of activities to make their life more enjoyable. One of them was a literary movement. As Japanese were fond of poetry by nature, they organized poetry club and published literary magazines. In Poston Relocation Center, Arizona, monthly magazines, *Mojave* and *Poston Art and Literature* were published. Editors and contributors were issei and kibe (sons and daughters of issei educated in Japan). Though they wrote poetries, short stories or essays on many different hobbies in Japanese language, they avoided expressing their hardships or fury to the government which treated them in the way against Constitution of the United States. However unjust treatment they received, they tried to be good citizens and maintain order. These magazines reflect Japanese Americans' complicated feelings which WRA report failed to tell.